河海抄

匂宮
紅梅
竹川 十六

へ利12
1272
16

河海抄巻第十六

正六位上物語博士源惟良撰

才女七

匂兵部卿　一名薫中将

巻名

是ハ匂ひ兵部卿かほる中将ところなく

いひつゞく

ひかりかくれ給ひにしのち

六條院崩給也

古今　文屋康秀　深草帝の国忌

草ふかき霞の谷にかげかくしてる日のくれしけふにやはあらぬ

御さうそうありて

坊にゐ給ぬる今上物語すゑある其三宮也

おとゝ宮はやうの宮のなさけのまゝかくいまち

なにとちるはへうれへをしこそわるむをいひてなされてもわるい
御うかりしきく
極乃尾円極乃地といへる也夕霧合昔絵也亥乃外男
せそれ人大姫君入東宮又女を鍾よりたく
御つらん事わもちみ同極おりし故都耐せすありすり
さりなうもうなしきわうむをいりくるおれしあり

六乃君ゝん
夕霧右大臣女　母曲侍惟光女
かよりれ出かられと　御略　日本記　大略　万葉集
うしとうのちうみかの一條院をわさしみなくまつ世給
あまりむ三条殿とよさことに十六日つくつくからむ
とみん紀宇紀

月十六日分別事　稲黒白也月也　倶舎論之二師説
一儀云自一日至十五日月輪次第増光故名白月
自十六日至卅日月輪次第減光故名黒月　是正義
一義云自一日迄十五日白衣天子十五人入夜別一人参入月宮故名白月自十六日迄卅日黒衣天子十五人入夜別一人参入月宮故名黒月　是傍義

とかくみ世のなにつ火をあらかうやうかく
左右（トニカクニ）　史記
佛此夜滅度如薪尽火滅　法華経
十四五て二月みたうみかりけわさ太子中おもり
あらくれぬそうそうりのうく丹舟
冷泉院御給也
いとゆうくらしういひて男をむ家てしかんと
安眠也

わかれをもをしむとも極楽には時なく雨のはなふるらん、
月 衣とも身をすてける法はいかでかみえんとこそおもへ
たちかへらむかの側（関おもきり）のくらし事の契りかし
薫中納言柏木権大納言の事也あはれ
くいをもつの身はさらぬわかれをもえてし
かるらそこぬよりあられ行なる

金光明経曰尓時虎者今瞿夷是
薩埵王子乃身をあたへし飢虎乃ことなり
花厳経曰迦毗羅城の釈迦女名瞿夷
法苑文句第十二曰　天台釈　未曽有羅云是瞿夷
子文
瑞応記第二曰　妙法記　昔時瞿夷是今日耶輸
耶輸多羅比丘尼子羅睺羅を為佛出家之後
經六年誕生大臣疑之耶輸多羅於児放火投
之全不焼是則誓言也
穏
出かくさくわうかの女乃れいのいろこ乃種はらむとも露をも（恩愛　出愛死苑之）
わこうらにめまとまうさ給らん事をかくし
右七遍照
くららも葉乃ふかうりにもまぬくりく何ゆへ露と定わきむく
いかゝ乃をかなしもと

女人身猶有五障　法花経
一者不得作梵天王　二者帝釈　三者魔王
四者転輪聖王　五者仏身
かの三さ給はんをやとらうめ思はむとおらまてや
るとおもひ合は
遁者也　柏木権大納言りえん煙乃むそをけ行也
おいさ海ことに百年の者はつるをなかりおへき

百首歌

むめ乃花の木をえらひ袖にほふ梅乃さは秋乃
たつくれをしのひおもひたる人ありて秋のなかめしけきさ
かりくさをものかはりかて花してきたい
くさしへかりすらしかしまきりをり

後撰
七日にくれ志りぬる我身はさぬるへかへ風のみつかひて
あしたのかくそおもひの秋のふかうねたゆまうらかね
いとあやしきまくく人のこころにしたりつみあ
梅の花なんちらりかわしれる人のとかしよにくれ
春はむかしの花そのとなり花いひ秋ハよの人の花にほ
みつえしけちの花はなきわちろこの花わもと
なさくれふるなまてとおいわにわもりこく
かゆへこかりのしかしむかまとをかけかなてい

梅

女郎花

名にめてゝおれるはかりそをみなへし

萩　僧正遍昭

見る人もなくてちりぬる秋萩乃花のまこと

菊　在原業平

こゝろあての老をわするゝこひふらせかひはなに

蘭

蘭蕙苑嵐蕭條地　色菊蘘蘭去三蔵　白楽天

若芸

見の紀とら
やまとかく
かす人ありくいさかりすはらひらくそ　更衆　久倍　日本記

なかれこその葉　なをさりせ　なへのまつらんらん也
いさなそれつ　引率
それやうまをて　不離カレス
のりゆきれのえりあるしはかりをも六條院なくいとこうへ
ことにしけく

賭射　清和天皇貞観二年正月十八日始之
北山抄曰賭射還饗食
大將先着座　垣下座上　依蒼円座　親王　大臣　次將上
次將着奥座　賭弓不依土敷円座依蒼也　若敷円座者土敷之
次垣下公卿着座　相對　次將　次立机　式次將机先立　三献訖巡
給客之真従禄之荒式禽東梅将監以下舁
天禄例也相撲之附三献之後亦次将令右相撲人舁
将作擬右相撲不将監作之散巡之後右相撲布引ある

此将作平春之と
延喜二年正月十八日御記云賭弓訖左大臣由右方
之左を官人以下以之賭弓勝事之以之与方
賭弓ハ天子弓場殿に幸て弓を読る也仲春
月弓をみる事礼記より出てより府　左右近衛　左右兵衛
舎人射之左右大将射手乃奏をとる事なく
後大将射手に饗食を賜也其時の管領なる也
得るこそ　いはく
色と紋こまへむかしれはひろくんせ
八乙女　風俗　拍子合十二二段各六
やをとめハわやとも紋そわつやとともに立ちし女
二段秋のあとこれらや詠る　秋のやをとめ　文方流
そしたて平野祭に男使なる時なるにつさあと

てらされ　大中臣能宣朝臣

みやまぢの松乃梢も分てとちとせやと契を
やこはおやまくろりろぬる世はとかれしにふにしき道乃
ありけ道也ゆてあつり
ちし
たち代衣乃やこはおやまの　梅花
ふる雪も冬は凌てよ梅花のみこそ作るなれ
秋乃風とおもし
一吉代大ねくつあるし乃白風信の作のもとを小し
ふるをとうよみし事也とぞ

紅梅
巻名　句哥詞で並一
按察大納言紅梅献哥詞字

これはおぼろの大納言ときこゆるは按察使の加二之也
此其比乃詞諸人語ふ稱ある是ハ橋姫為此姫よ
こ竹河世よかとまつりし竹河といふ同比に志てせんぬ
也薫中将と源中納言と云事　竹川椎本の秋中納言也
哥詞で又八丈乃はるかよるときよし奥よ
みつより所論此巻宇治の橋姫椎本総角同時也
此巻列して按察大納言侍しみつより竹河巻と
並べ一二と定らし薫中将竹河明姫宇治侍語
よまりたる竹河の次となるに又竹河の巻よ
中央宇治中将中納言也此巻よる姫君源中納言
按察大納言右大臣よなりちくして又按察大納言
よみに所論此巻ハ竹河乃中央にあるべき
以風を以てわたいのちらの此歌もとに也とぞ

・御さうし跡をふりても聞しさみを
野臣太政大臣（鬚黒大臣一名也） 傍昇大臣 一変野一名を野臣
大臣と号ととし武琉後太政大臣頭今上にれ世太
政大臣二人也 終任太政大臣 前のうら葉に任 鬚黒大臣
紅梅是也 仍後とこれ又熱く 竹河巻 終任 中比太政大臣
五人也 つ入大臣三条太政大臣六條院諸任大臣鬚
黒也 その中めを後世古今集に忠仁公とこそのせさ
れかいはうら知しからハ前官の例よハあるへき也
其比太政大臣只二人也 仍後不辞官お後乃法也
若此等例
素寂云 殿臣乃字今ことに思かつるる事あや
河の様と重代の事よ書置て給ふ人行成て自ゝ
野臣と家ぬかりぬ給く信とより給さ

ゆるさせ給ゑまひ給ふ事のらこのひつてかなもあらぬに
鬚黒大臣女 夜云作つる人家を世子
ひあきんを　昇下
かと氏孫乃れことなりを我ゑまやりいつてきこく
夜也くの頃の女れ乃れこと紙もゆいつてゐりて
やこか前民執政臣女后妃よそなりけんさんせ上古
ハ外祖外舅として摂政ら也
えまうなゐ帥のやうに
ゐゑここをはうる御つらんと
かゝうたに侍ひ出えとらゑ思くうつことを御[illegible]
ひとりつゐくやゐ侍[illegible]ん
こをハまれりて以てられ 昔宮也
・出のこと世よのなり給つる源中納言兵部て又乃かるも

むかしの人よおもひかけり
なるはとして志川屋のあをうれよりうもなゆかに
らうことほとらとのさゆく
押弁 柱 撥音
この舟をとるゆく 宿衣姿
はちひさみ 仉渾
かちふえふつりま迎まりこゑしこゆ
波笛 嘯也 太笛フトフエ ふへみかしとよみ太フトシ
文選嘯賦云動脣有曲激口成音 注曰善曰
鄭玄毛詩箋曰嘯蹙ツクミテ口而出聲也
九條殿記曰天慶五年正月七日壬戌臨甚雨依
其例尚乗馬之日酒盃十巡之後酒氣
吹波笛武部数定親王之不るなけ之樹之日

古詩甚感悦矣
原事第云在李ア王純為嘯也と
早職事之波笛 彩儀示
或人云自失朝笛と添まり以波巻上大补或賢
成波笛之戯と
これらんうへはちふのさらうさかうこいの
春風小戸々堂竹曉日東簷一樹花 白氏文集
志う人う志うとて
天かそてもねかうそむ梅花文とくうとも志う人そわ
りかへてゆをゆかくほそんい
木ゆをわうてのぎゆをわうゆ竹のゆのやに称うるうなつまり
むかし言つきれるさうにをこの文かりこそ八佛のくれ
くゆきいあむわるこうゆかわするむかうするうきん

をとこもいそぎつゝとしてふかくしてこゝろもとなり
ふかきやまにふかくしてこゝろよきことゝゆきてそ
大論云尺迦仏入涅槃之後阿難登高座集法蔵
時ニ諸比仏弟子皆疑仏再出給
あらぬひとのこゝろをやあるらむ
先せ文云緒也　東こゝ南流に説中に聞ともあり當從
の心おき叶気
あきらめ年わきこめて表いつもい川常にハ我宿にあらけ
わ婦なる舟乃ともしからわくらんむ志ろ大梅よハたよれる
採揉
取よ父とハしらぬしめ花かくことゝふかハさりける
これかるかあるしは
拾遺
春きてそ人もとひける山里ハ花こそ宿のあるしなりけれ
志るともなくなん人よ花さこそうきとしくなり

あさましよ此月しのはなきかなくハ嘆なれん人かさそや
伊行尺真入我式心のおき叶気
あたし人とよ
他人(アタシヒト)日本紀　越人 孟子　他心(アタシゴコロ)日本紀　異意(月) 万葉
桜ちるさとのこゝ春の心ハあらしくさこいのかるさ
あらうちらく　後言(シリウコト)
ともつれの袖ハ花をえたるのちにや
本也あや　万葉二　本人(モトツヒト)とあり
父ハ心つかいのこゝにこそつまんと
ふかいる我このしとらのへ頭なさつかねとなりにれハ
ぬさりしさあり
八の文乃心の表めとれん何あさつてをいとし海
かくありこゝ給

宇治八宮 白河帝御宇 八 兵部卿之宮 宇治之中宮方
総角巻迄但推本意に宇治中宮よりあり
そこしそ乃海さしにさらし歴りここにて於く
行しらぬ哀は人まろさ此ろのさくや前よも残るよりあり

竹河 匂兵部卿之巻並二

巻之名
竹河贈答在当巻 而宰相侍従薫侍従方 梅花 女ね
与冷泉院女房贈答之也 又正月廿余日 宰相侍従来
会玉鬘侍従因謂之 竹河曲
東之竹河並又横笛並之 句兵部卿 巻二月薫中将侍
従中宰同年秋 太子中将加階之後 三位宰相附
十九歳之竹河巻始 又終 宰相侍従 終任中納言 紅梅 分合

わこうら 悪後達
むらさきのゆかりなとかきさめれと
鬚黒大臣と光源氏乃ゆかりなとあらねとふくみ也
かの大殿ろうり此後達乃物語を書かりひとしとや
とのふ類
人のをかしくやすくあやしかりなるれは留ことさりん
此巻乃始わしの詞よってあきらかなれの哉
ともことここうや何ろうく意趣わ類の此物語
乃附代人の推揚なしても人といふ旨詳よ一篇なるらう
事なり例も雅と道まんなのそ也 ふうり類
ごれのとはるりかく宮ゆかりなる人の 巻 より
人乃もろくさ豆のこう済見さなり出れたて

人心好悪太不常　白氏文集
難しはところく　飲給
たゝまめやかにそらへらるゝもまつんもまつりし
已被楊妃遥側目　白氏文集 上陽人　在桐壺巻
ましるしうみさこゝ給く
よりえともなもなや世の中そとし
思し給てとハめてことよりつへく
伊勢物語よかりしてぬとみいてかたくなに
六條院乃御ことよとさく院の文紙にもまれ
給ひりしことゝ冷泉院の御ことのやうに落りはく
四條の御後の給十字ありめく
かむ乃さみとむこみく見ゆめくれりしめし

伊勢物語よむところつてあり
わかれとのことよ
男虎（ソノコトモ）　傍人（ソノコトモ）　遊仙窟
ふかれしとひ給つるかひれよのつるすゝ須
白　あま也
よそおくいとこくあるよやけるむ金うふまりれ梅の（神纯）
抗（ミリ）　廣韵　りこく橋本也枝字ともあかきやうあま也
野文云合判頭之（吹）らくさにはかふ純乃わかりけりと
ところ乃やうまて御きみて給ましこし
さうハ袖ま遣こゝみうへしあとつひそけふよ御こともいふ
よりとやくらく
古今　冬かくとあこそわかれとかやかね誰袖ま遣ふ屋の梅ぞて
らそこそやとなくれと

はるかなるはつよるに見えし也おもふてつまるかみなを見るかな也
いとくしかるなし　後鳥羽院
せんかう乃中さ　盛しかる也
さくらんの　梅枝
じゅうとうかさく　梅枝　催馬楽
あつまあそびにうたふかのうたにてうたはれ
うたいかしとおもなさつくしみちしく
梅枝ハ哥の名也
うぐひすおもはさるれのへし
鶯聲誘引来花下　草色拘留坐水邊
古今
花のかを風乃たよりにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる
ゆきくるうぐひす　此處石
みちよへきとおもひはきんや　言吹　寿コトブキ

声きくはとおもふにもえみつらしてあるふ
竹河　石
たけかはのはしのつめなる花そのにはなよ見れとやくらむ
むすびの恋とハ未練乃人なるかへよるの人にて同意に
つなしあれと恋あるき歌
恋ハもとくはおもかなしとはまれて
酒飲なんとハ筆頭　伊行尺
古今
こふるには志のふることそゆきよるのきぬのそてにかへる
なみそりるとゆうしきこて
うむまやかくらふきよるわ
水澤　此池ハ男諸みよあり世俗によとこをたつる
なとつふるゆ也　正卿會庭之縁也
くみけふのつうらいてしひとつみ

一河内国ニ武大和国宇陀郡ニ竹河流ニ出見鷹泥

拾遺
しらみち葉のすゑにはかに竹河乃淵のみなりを尽うらん
ころしまやをたゝしとらわきこゝもちかに
さく桜あまたちるらんくもりなかれの河のきよらに
ゆくて咲さくら嵐の桜花咲桜あれいちる桜あり

古今　業平
さくら花ちりかひくもれ老らくの来むといふなる道まかふかに
絡須乃天をうたゝ所と人とく　貝鮑
はさくられをいつ木ゆかりみなみゝ津ましく道をとこふみなりよ
ちらんとこ所ろれい

童稚尽成人　園林半喬木　白氏文集

身おのまゝへとんともなるこそあれと
雑篇　身おのいへとくらいうそあいとこゆかいる無し也
はこ文のあやめとられこゝ見えつゝまりちりな也

波乃さらふをみまかりく

古今
桜色尓衣ハふかく染て花のちりなむ後乃かたみ尓
太るせ浮のあきをいらさとそふやなれやかなり
つるとあり　高繁　乱繁　高繁ハ花也

ちりかふのひら　意
後撰
桜ほころふる思ふまゝに咲とみえく
人ハろくのくまはさるをてこゝろき浅といふそここゝろん

古今
人あらくつ里乃みさつれ出る花あやとそりても散るよ道
桜はちをあるにはなやし花ちれは落てもみなあにそられ
されき　訓云
桜花ちらんにいはむちりにはあまつりの袖ハあるやハ
太更にすゝみつりの袖もなき花也風まかせし
いひやもて　いひくそしも也
くれるくるのころやこにおもしろしまあるを

人のむかしのやうにもあらぬとも
うちいそぎつ　集に
ひと川よりのぼりてゆかしくなれ
うきふしにあはゞ見えしとぞめでたき袖なる
ころもへにもやまぶくとりもなかれ
夏のゆふぐれのまぎらはしきによ
歌説　あらはれ来　見説　伊勢物語云若年
はらからもあらねばみじかりこころこそなけれ
むかしはなれは　白楽　日本紀
伊勢物語　やうれしやはつとそまでつゝれあはれ
せさうみのあまもしくとみつるほかくにそそうらのあ　まつらの
かりぎりやつよきみうらみまけとんへよいつまでうらみ
圍碁の時に此淡路よりて出る勝負なれ

めいりぜんはいらくへうちとよりめぐり
あられしくきものかせしいましあひ戦を取るからそ戦ひとおもし
圍碁のかいさしにてふすかれいにもつぬのへ
九日のつくしのつり行
蝉丸大臣太政大臣入冷泉院　正月九日
大上天皇納妃例
寛平法皇以京極御息所　女　左大臣時平　為妃
さうなしとそ　雜役
そそうなしてそのことかはしく
此はもろもろのかしこき世中にこそいひたれ
はつれんものをいふをなられんの深く思ひやうましく
みちのいのれ待ちもはしておもわらむ
史記曰　季札之初使北過徐君　徐君好季札剣　口弗敢言

言季札公子出使上国未献還至徐君已死
於是乃解其宝剣繋之徐君家樹而去従者曰徐君
已死尚誰予乎季札曰吾始吾心已許之豈以死
倍吾心乎　呉世家
漢月垂中吹不駐徐君墓上扇於然　朗詠
まかせはわるこ　忠岑
そへしかりて　かとこたちをしれなれ
君諱哥　正月十二日
たのめ徒乃物徒右乃かとうすり
ともかしよのくするりわきは思いくられく
与斎物徒竹河うらいしあ也　右歌趣わ勅し
ちんとうくされくちとさみめしるまいつ
哥長系　踏歌曲　勘袍当考し

あつのうさみくうみはあつしやありきんくも此く
ちくいろをみさりきなとるりなへい
[illegible]
これとのみしわらいな
此歌　右
いのりてまちのりなる　五十日
かくいくてのそていろうん
世中とかくいくのそくいふやいいまらんととぐ
云さしくたわまなるむしの生いみてもさいて　五乃
事かなひな
以尚物議を例　一執
あつまち故尼のとそなるいらみむ為かとれをおんとも思
右大臣らせ給く　右ハ斎大納言尼大ねけ給つる右大

ほそりつゝ紆つさくの人すりおりてこの
　薫中将権中将自宰相中将任中納言仍弐参与推参自時宣
られ中将ハ中納言ニ三位の君ハ宰相ニなどゝこゝろし
給ひつゝ
薫中将推参秋自宰相中将任中納言仍式参与推参
参同時節也
国史云右大臣藤原朝臣[従二位]三守阿波守従五位上真作之
弟五子也三守早入大学受習五経
　歴文章生人任大臣兼大将例　付清右大臣るゝ

菅家
　貞観四年五月十七日補文章生九年月日得業生十一
年三月対策及第十八年正月一日位従　自家中夫略之
寛平五年二月十六日任参議（元式部大輔 従四位下五年）同七年任中納言
叙従三位寛平九年六月九日任権大納言兼右近大将
文章大臣任将例也
　昌泰二年二月十四日任右大臣大将如元 五十六
菅原為将　号山井大将
寛平二年補文章生延喜十三年正月廿八日任
中納言同四月十五日兼右近大将
藤原在衡　粟田左大臣
延喜十二年五月日補文章生
十八年十二月九日得業生対策及第　中夫略之
安和二年三月廿六日任右大臣　七十七
天禄元年正月七日転左大臣
和梅右大臣橘家大納言事
粟田集云天慶六年正月菅大納言の所せう給ひて

こゝろあつめつる奥儀を氷とけぬる池の奥乃
九條右丞相と前大納言と中宮とよみたり執柄ハ
男子執事太政大臣なとゝの郷乃令也
れいの事ハみくるしきことあらめ 評
わかのかたこそいやこうらわきしひくれかゝり
わたくしやこの事也
人のおやかくいかくしり給ふの稙ちハいとわかやうに
おりいうちらるもへやあも也かやうにおろとへかゝらら
乃ひかこゝのふしちらくハわかゆかもかさまるうきを
のとうあれそらしと思ひ給つり
大かたいらうもみまうけはとらぬ樣しなら
玉蟾事也薫中将を詠まてみまし人と思也
宇治文姫寄事紅梅巻にみえたり 同事也

そハいやうへ代名乃のこゝろむらし

垣下着座

出納て文人の大夜のうゆるのとゝりさらともゐれゆるる
るらしにハかゝりまうしこと

賭弓還饗 在端

後撰序云をもゝれ乃こゝろわかしにとるへしと書て
あつしのはなのかさしふさとて 三条右大臣
女郎花るの名のみにかなみにふ花のかさしみしまん
多乃ふりゆときゆりまくしまりよれておりよまさる。
左大臣乃ゆきのこゝろまらもまとのあつかなと
此出納て文を清中宮へよ右大臣大饗爲乃名
ふも清中宮爲也
ここ文云ゆくほとくこれ部く乃からいゆくとも哉

折枝の末葉 紅葉て文をむすひしこそ紅梅大納言
にあはれなることのあはつかさやうなりしかとく
てやはらかにも書くやさしかれ玉鬘の我やうち
のくるしさに思はくせられけり
はるさくら井をとゝるよとゝおもひて次とそいはま
ほしき事
ちかよらぬもしたとし南ほまきやこゝふくなり
むかし人を求るもなり